みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

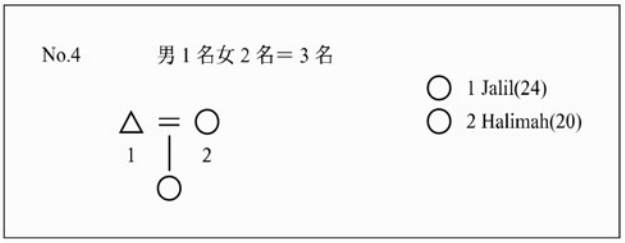
Life World of Kampung Durian Tawar : Hierarchy and Household among the Orang Asli, Malaysia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信田, 敏宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004003

校卒であり，世帯調査当時はスレンバンの工場で働いていた（月給 300 リンギット）。タホッ夫婦の間に，子供がなかなかできなかったため，タホッの妹（プユー（Puyuh）（No. 11）の妻）の子供を養子とした。

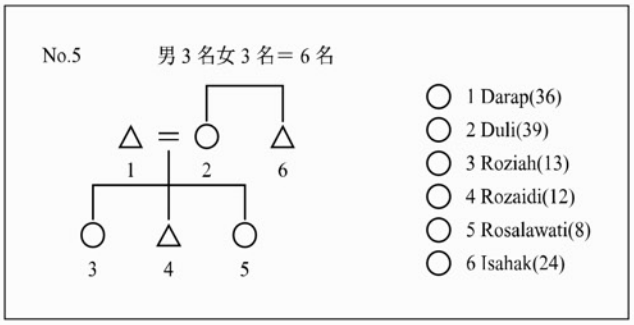
養子であるイサ（Isa）は，タホッと折り合いが悪く，1997 年，ルンバウ（Rembau）のオラン・アスリ集落でタンカップ・バサー（*tangkap basah*）によって結婚し，そこに住むようになった。タンカップ・バサーとは未婚の男女が 2 人でいるところを親族が取り押さえて，結婚か罰金を迫る状況を指す。タホッはこの結婚には反対していたが，イサが意図的にタンカップ・バサーに遭うことによって結婚を押し切ったと言われていた。

タホッとエンケンの夫婦は，いつもゴム仲買店主アマンにゴム採液収入の前借りをしていた。自らの経済力以上に電気製品や家具を購入するが，その返済が間に合わないのである。狩猟の名人であるタホッは，「下の人びと」を指揮して，プタイやラタンなどの森林産物の採取の仕事も行なうので，「下の人びと」の事情に精通している。



No. 4

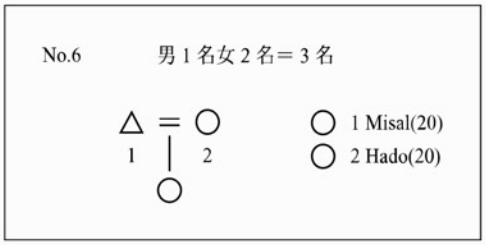
Kg. Tuan（Pahang）出身のジャリル（Jalil）の父はマレー人で，母はオラン・アスリ（Pahang の Temuan）である。両親はムスリムだが，彼自身はムスリムではない。1996 年に結婚した。妻ハリマー（Halimah）はエンケンの姉クディー（Kudih）の娘である。クディーの夫は 2 人目の子供が生まれると，出身村ドゥスン・クブール村（Kg. Dusun Kubur）に帰ってしまった。その後，彼らは離婚した。ジャリル夫婦は，タホッ夫婦と同居していたが，1997 年に娘が生まれてからは，タホッ夫婦の家の裏側に簡素な家屋を建設し，それ以来，そこに住んでいる。彼ら夫婦にドリアン果樹園がないのは，若くして亡くなった妻の母からの相続財がないからである。世帯調査当時，ゴム採液業と夫のプタイ採取によって生計を立てていた。



No. 5

ダラップ（Darap）はマンク・ハシムの長男で，ドゥリ（Duli）はマンク・ハシムの姉ブチェー（Bucheh）とカルの間の長女である。交叉イトコ婚で，ドゥリが 3 歳年上である。婚姻の形式は，「婚約を省略する簡易な結婚（*singkap daun ambil buah*）」であるが，タンカップ・バサーではない。ドゥリの弟のイサハッ（Isahak）が同居していた。

ダラップは，午前中はゴム採液業，午後はプタイなどの森林産物採取や狩猟に従事していた。したがって，ゴム採液業による収入だけで，彼らの家計を考えることはできない。1998 年当時，パティン・ジャングットによって与えられた宅地に家を建設中であったが，「その後」，新しい家に引っ越した。元の家には，ダラム村に住んでいたダラップの弟夫婦が住むようになった。ただし，この弟夫婦もダラップの家の隣に新しい家を建設中であった。



No. 6

ミサル（Misal）はアジョイ（Ajoi）（No. 28）の息子である。アジョイはミサルの妻ハド（Hado）と同じプルット（母系出自集団）である。アジョイ自身が近親婚であるが，息子ミサルもまた近親婚である。

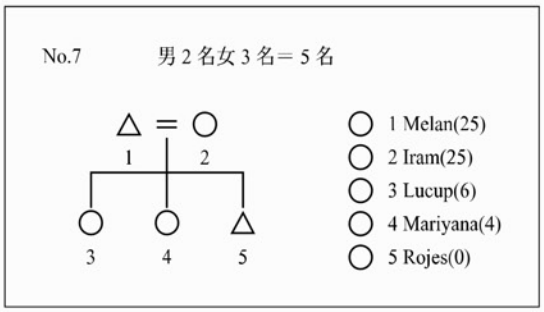
アダットで禁止されているインセスト（スンバン：*sumbang*）に抵触する近親婚で

あったため，彼らの結婚はタンカップ・バサーによる結婚であった。正式な手続きを踏むことができなかったのである。1996 年 10 月 1 日のハリ・クスダラアン（Hari Kesedaraan）という年に一度の大祭の夜，ハドの家で同衾し，次の日の朝にカルらによって捕まえられた。裁可（*hukum*）の後，日にちをおいて，結婚式が行なわれた。ミサルの父親であるアジョイはティカッ派であり，ティカッをはじめとするティカッ派の面々もこの結婚式には出席した。村びとのほとんどが出席する結婚式としてはおそらく最後の結婚式となった。なぜなら，その後，村の人びとは分裂したからである。

妻ハドは，幼稚園の助手をしていたが（月給 400 リンギット），その後，娘が生まれた。ミサルは，ゴム採液作業を行ない，実家のゴム採液作業の手伝いもしていた。そして，森林産物採取も積極的に行なっていた。

家屋は，1992 年にハドと彼女の母親チチョット（Chichot：1996 年 6 月に亡くなった）が住むために建てられた簡素な作りで，電気を通すことができなかった。水道は姉イラム（Iram）（No. 7）の家から引いていた。「その後」，PPRT の家屋を得た。

姉のほかに，男キョウダイが 2 人いて，そのうちの 1 人であるアダム（Adam）はブラナンに住み，キリスト教に改宗していた。もう 1 人の男キョウダイであるザイディ（Zaidi）も結婚して，スランゴール州のウル・ランガット（Ulu Langat）に住んでいた。

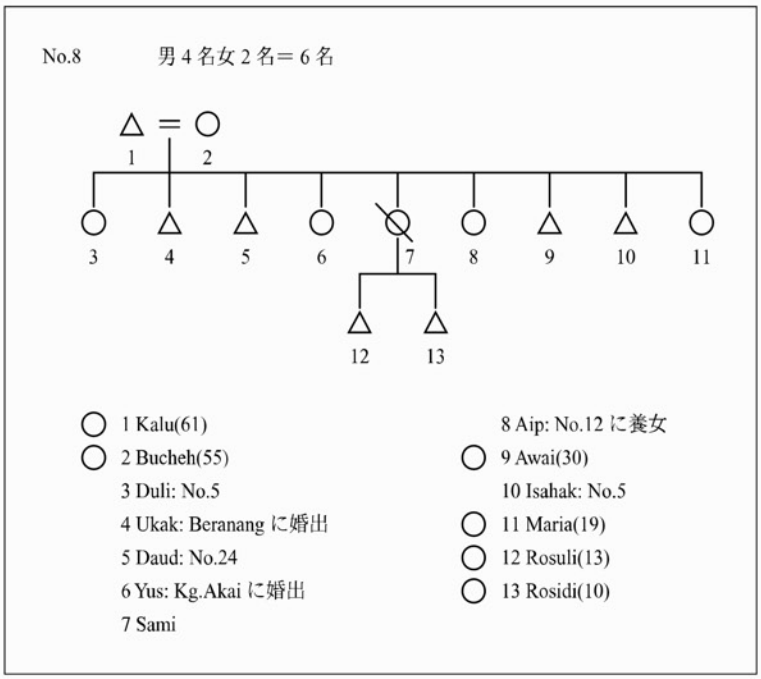


No. 7

ムラン（Melan）はスレンバン近郊のパヤ・ルバール村（Kg. Paya Lebar）出身である。「その後」，パヤ・ルバール村はイスラーム教徒用家屋建設プロジェクトのために村の土地の一部が回収された。彼はその補償金を受け取った。ダラ（Dara）（バティン・ジャングット（No. 14）の第 5 妻）の母は同じ村の出身であり，ダラとムランは同じ母系出自集団に属する。そのため，ムランはダラの娘スハイナ（Suhaina）の結婚式では新婦側の親族として婚姻儀礼に出席していた。彼は，ブディル（Bedil）（No.

12）の大工の仕事を手伝っていたので，ブディルと共にティカッ派に与していた。しかし，その後，バティン・ジャングット派に協力的になった。

ムランは自らのゴム採液収入だけでは不足なのか，アマンのゴム園を借りて採液作業をしたり，ブディルの手伝いをしたり，ラタンの採取をしたり，その時々の状況に応じて生業を転換していた。こうした生業の仕方は，ミサルも同様だが，子供がまだ小さく，ゴム園やドリアン果樹園も少ない結婚間もない夫婦に見られる生業の仕方である。子供の衣服・教育・医療など，現金収入が必要な時期なので，それに応じる形で収入の多い仕事を次から次へとこなしていくのである。



No. 8

カル（Kalu）は狩猟の名人であり，森の知識を持ち合わせている。「非常事態宣言期」には連邦軍の下で働いた経験がある。沈香（*gaharu*）やラタンが採れた時代には，息子たちと共に採取作業に従事した。当時はかなりの現金収入があり，村で最初にテレビを購入するなど，まさに全盛の時であった。その代わり，当時は酒をよく飲んでいた。森林産物の乱獲などによってブームが去るにつれて，困窮に陥った。世帯調査当時は，テレビもなく（売却してなくなり），古いラジオがあるだけであった。ゴム

採液業，ドリアン収穫，野菜（野草）の採取などで細々と暮らしていた。子供たちは成人しているが，親の生活を援助する様子はないし，カル夫婦も子供たちに頼る気もないようであった。

カルはPanglima Gajahという称号の保有者である。彼は，バティン・ドゥラン（Batin Dulang）というかつてのアカイ村のバティンの息子の1人である。キョウダイは12人いる。兄には，ミロン（No. 13）の父がいる。マンク・ハシムの妻は，彼の女キョウダイの養女である。妻のブチェー（Bucheh）は，Katak（カエルの意）というあだ名を持つ。ムライ（Murai）の娘である。

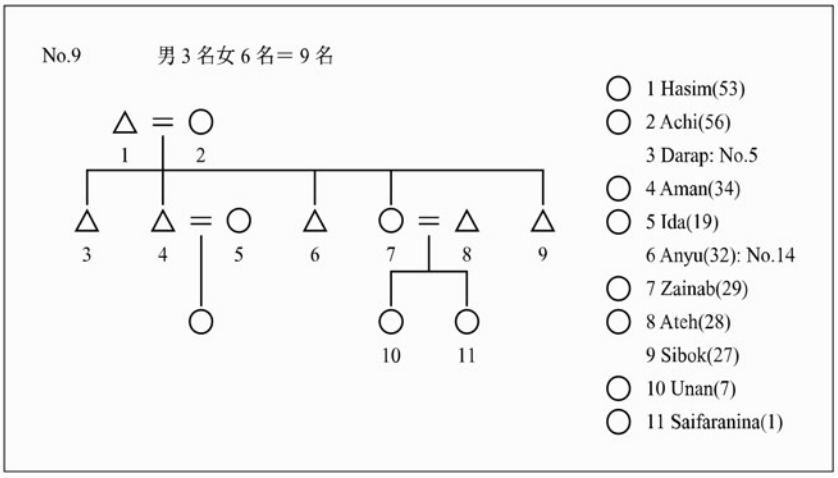
世帯調査当時，同居していたのは，息子のアワイ（Awai）と娘のマリア（Maria），そして亡き娘サミ（Sami）の2人の息子であった。サミはハントゥ・クニン（*hantu kening*）が原因で死亡したと言われている。ハントゥ・クニンとは夕方，空の色が黄色（*kening*）になるという異常気象の時に出てくるオバケ（*hantu*）を指す。オバケが体内に入ったことが原因で死亡したと言われている。夫はキオップ（Kioop）（No. 60）の兄である（その夫も森林伐採作業中の事故で死亡）。カルの子供たちは，バティン・ジャングット派，反バティン・ジャングット派などと婚姻関係を結んでおり，彼らには両者の情報が入る。逆に言えば，バティン・ジャングット派はこのような人たちから情報を得ているのである。

「その後」，娘のマリアはバティン・ジャングットの息子ランと結婚し，彼らにはすでに2人の子供がいた。そして，妻方居住の原則に従い，彼らはカル夫婦と同居していた。

No. 9

ハシム（Hasim）はマンク（Mangku）の称号保有者である。彼の家が村一番の裕福な家であるのは，義父ムントゥリ・レワットの遺した財産による。妻アチ（Achi）はトゥオ・マンク（Tuo Mangku）の称号保有者である。彼女は「純粋な」華人である。幼少の頃，両親が日本軍によって殺されたので，オラン・アスリの養女となり，オラン・アスリに育てられた。

かつて，ダラップが住んでいる家屋（No. 5）に住んでいたが，森林産物ブームで儲けた資金を元に，新たに家屋を建設した。その場所は，かつてはアキ・マインやアキ・マインの義兄ムンキンらが住んでいた場所であった。そのため，「ジュモイの場所だ（*tempat jemoi*）」と忌み嫌う人もいる。やせ細って死んでいくジュモイ（*jemoi*）という病気でアキ・マインの義兄が亡くなったためである。ちなみに，このアキ・マ

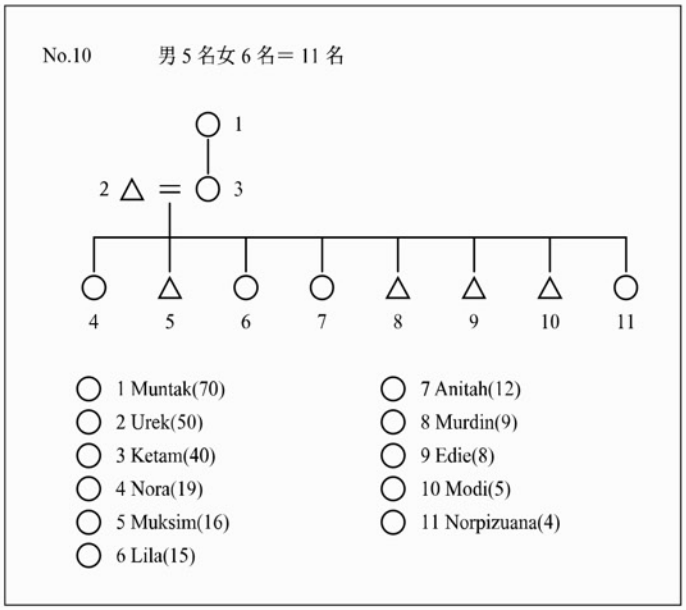


インの義兄ムンキンは有能な「呪術師（*dukun*）」であった。

世帯調査当時，同居していたのは，アマン夫婦とザイナブ（Zainab）夫婦である。アマンは新居を建設中であった。アマンの妻は，パハン州出身のジャクンの人である。「その後」，アマン夫婦は，新居に移住した。アテェー（Ateh）とザイナブの夫婦は，「森の生活」を好む。アテェーはブラナン出身である。娘ウナン（Unan）は華人の小学校に通っていた（「その後」，華人の中学校に進学した）。アニュ（Anyu）はバティン・ジャングットの娘イア（Ia）と結婚した。当時，アニュとイア（Ia）の結婚によって，バティン・ジャングットとマンク・ハシムの間の結びつきは強化されたという見方があった。スィボッ（Sibok）はダラム村に婚出していた。「その後」，スィボッは妻子と共にドリアン・タワール村に移住した。

息子たちの協力で，開拓地を広げ，ドゥスン・スルダン（Dusun Serdang）やドゥスン・セドイ（Dusun Sedoi）のように，森のなかに広い果樹園を所有している。ゴム採液業も積極的に行なっており，ドリアン収穫による収入は他を圧倒していた。アマンはムントゥリ・レワットから引き継いだゴムの仲買店（*kedai getah*）を経営しており，華人の頭家（*tauke*）との関係も強い。

華人との混血ということが，生業形態や生業への取り組みに影響を与えていると考えられる家族である。



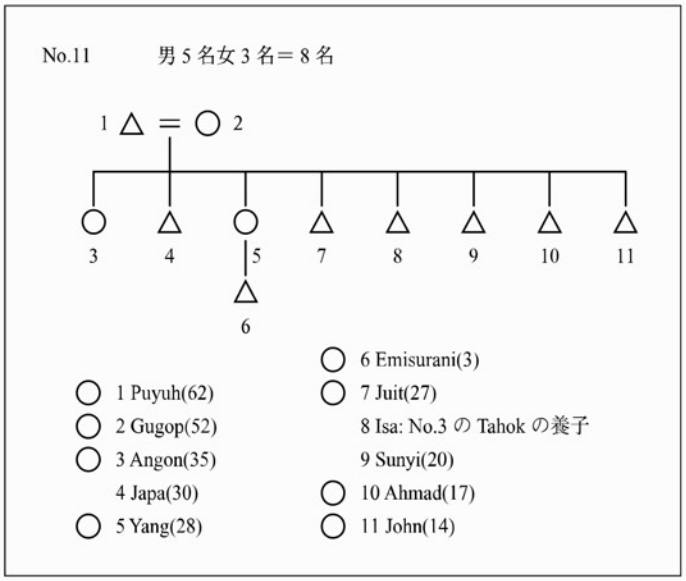
No. 10

ウレッ（Urek）の父親はバティン・ドゥラマン（Batin Deraman）である。彼は「下の人びと」出身である。妻側の親族との交流があまりない。ゴムの採液作業は妻クタム（Ketam）や義母ムンタッ（Muntak）が行ない，彼自身はプタイや森林産物の採取に従事していた。そして，時々，華人によって雇われた日雇い労働に従事していた。世帯調査当時，ドリアンやラタンの頭家である華人に 6,000 リンギットの借金があった。ウレッは「酒飲み（*mabuk*）」である。ゴム園の一部を華人に「賃貸」している。これは，ゴム園を賃貸することで自分は森林産物採取などに従事するためである。結果的には，自らゴム採液作業をして得る収入よりも低い収入しか得られていなかった。ティカッ派の人物であり，PPRT の家屋提供プロジェクトを 1996 年に受けた。世帯調査当時，娘のノラ（Nora）はジョホール州の工場で働いていた。

No. 11

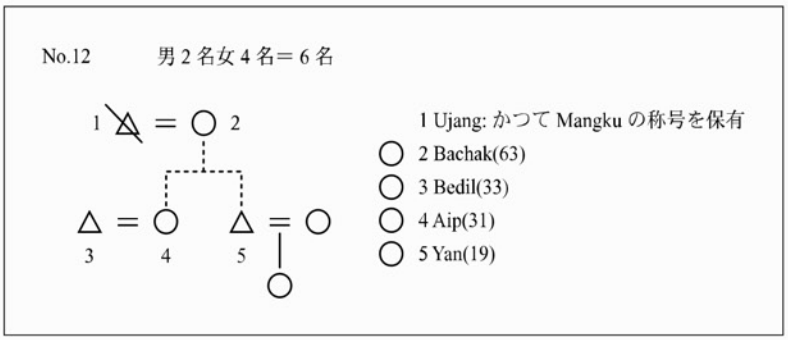
プユー（Puyuh）は，吹矢（*temiang*）作りの名人である。村のほとんどの吹矢は彼によって作られている。彼の家族は，子供が多く，貧しい。それは，酒飲みがいるということではなく，子供の多さによる貧しさである。長女は「障害者（*cacak*）」である。

世帯調査当時，家の裏に「伝統的」な家屋を建てて住んでいたが，それはたんに家



をつくるための資金がないためで，いわゆる「伝統回帰」という現象とは言えない。妻グゴップ（Gugop）は，タホッの妹である。働き手は息子ジュイット（Juit）だけであった。他の息子たちは婚出していた。当時，ジュイットはアニュのゴム園を借りて採液作業をしていた。夫がオートバイ事故で死亡した娘ヤン（Yang）親子が同居している。

世帯主であるプユーが吹矢作りの名人であるということから推察できるように，どちらかと言えば「森の生活」を好む家族である。



No. 12

ブディル（Bedil）はアキ・マインの末子である。彼は，バティン・ジャングット

に表立って反発しているようには見えないが，ティカッ派である。しかし，村のバティン・ジャングット派の人びとと対立しているわけではない。ティカッ派の多くの人びとは，たんにティカッに従っているだけなのである。ブディルは「上の人びと」と「下の人びと」のアキ・マイン派との仲介役をはたす人物でもある。実兄ユウの紛争――ユウが No. 13 の家に酔っぱらって怒鳴り込んだ事件――の時，兄に代わってバティン・ジャングットから裁可（*hukum*）を受けた。この事件の詳細については，拙稿（信田 2003）を参照。

ブディルの仕事は，家屋建設作業を請け負ういわゆる大工である。ムランやウレッの息子，そしてイナン（Inan）（No. 54）やアキ・マインの孫などを雇っていた。ドリアン収穫作業についても，アキ・マイン派の人びとに仕事をまわしていた。

妻アイプ（Aip）はカルの娘だが，マンク・ウジャンに子供がいなかったので，養女となる。マンク・ウジャンの妻バチャッ（Bachak）が同居している。彼ら夫婦にとっては「母」である。バチャッの男キョウダイにはラボー（Laboh）（アワス（Awas）（No. 61）やキオップ（Kioop）（No. 60）の父）がいる。

ヤン（Yan）は，No. 34 のバンコン夫婦（妻ビルがマンク・ウジャンと同じ母系出自集団）からの養子である。彼は，スランゴール州のオラン・アスリの村に婚出していたが，結局，経済的な理由から妻と子供（男子）と共にこの家に住むようになった。もう 1 人，バチャッの男キョウダイからの養子もいたが，幼少のころに亡くなった。

この家族は，すべて血のつながらない「家族」である。ヤンには子供がいるが，ブディルとアイプの間には子供がいない。

ブディルは実質的な舅・姑（*mentuha*）であるカル夫妻と姑のバチェッの面倒を見ていた。彼らが沈香の採取のために森でキャンプするときや，町に出かけるときには，ブディルが自動車で送り迎えをしていた。

6.2　バティン・ジャングットの親族群

No. 13 から No. 25 までは，バティン・ジャングットのキョウダイの親族群となっている。ピンダーを祖とする母系出自集団の一翼を担うグループである。バティン・ジャングットの場合は，前妻の子供たちとの間に確執があるので，必ずしも一致団結したグループとなっていない。しかし，実兄であるジェナン・ミサイの子供たちのように，次世代の子供たちになると，それぞれキョウダイ間の結束は強い。

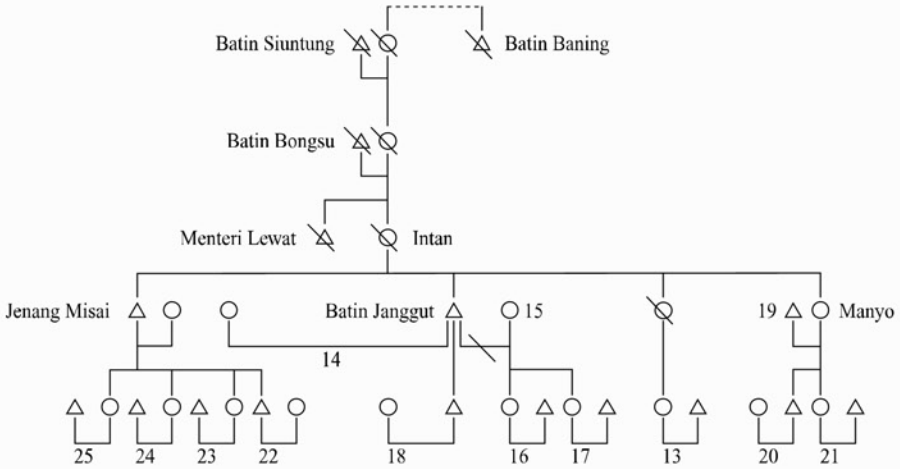
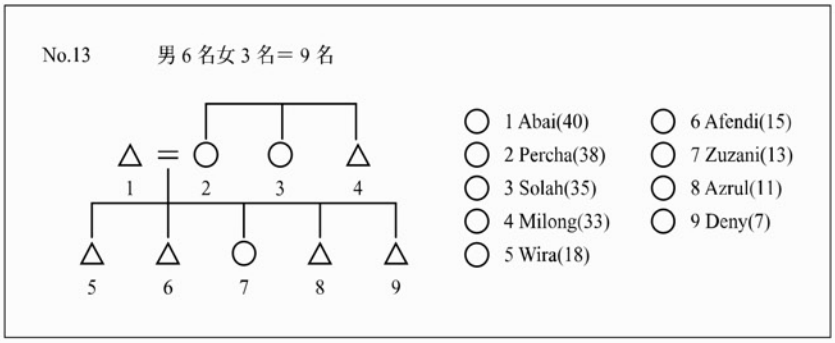


図 10　No. 13 から No. 25



No. 13

アバイ（Abai）はアカイ村出身で，彼の父はバティン・ドゥランの兄の息子である。妻プルチャ（Percha）とは第 2 イトコの関係にあたる。プルチャの父はバティン・ドゥランの息子。アバイの父は，バティン・ジャングットも認めるリーダー的素質を持った人物だったが，イスラームへ改宗し，ムスリムであるトゥミアール（Temiar）の女性と再婚した。アバイの母は，アキ・マインの女キョウダイで，オタの母の妹にあたる。ただし，オタと同様，アバイはアキ・マイン派には与していない。

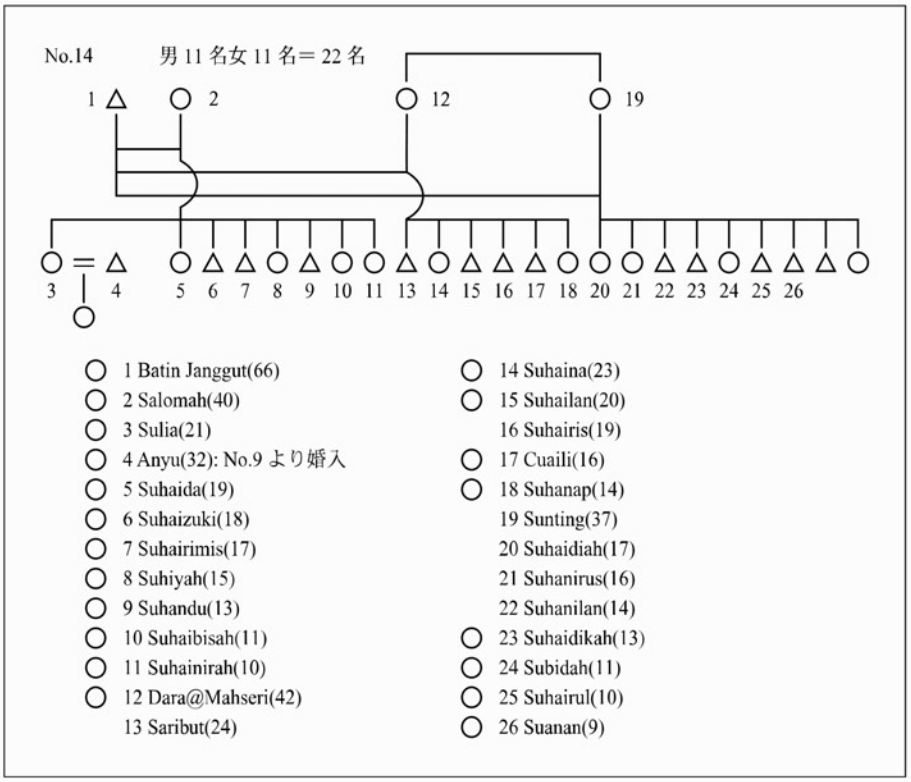
プルチャの父ルボン（Lebong）はカル（No. 8）の兄である。彼は妻アモッ（Amok）の死後，アカイ村で再婚した。アカイ村ではジェナン（Jenang）の称号保有者となった。プルチャの母アモッはバティン・ジャングットやジェナン・ミサイの妹である。

長男ウィラ（Wira）は高卒である。成績優秀であったが，奨学金が得られなかったために進学できなかった。

プルチャの弟はアカイ村のバティンである。また，世帯調査当時は，弟ミロンが同居していた。「その後」，ミロンはナー（Nah: No. 41）と結婚した。妹ソラー（Solah）はスレンバンの工場で働いている。かつて，父やミロン，そしてアカイ村のバティンはキリスト教へ改宗したことがある。このことは公然の秘密とされている。

私はこの家族の養子である。つまり，プルチャの養弟（*adik angkat*）となったのである。プルチャはバティン・ジャングットの所属するワリス（*waris*：母系出自集団）の核となっている女性の 1 人。

ゴム園やドリアン果樹園を多く所有している。また，アバイの関係で，野菜の仲買を行なうなどアカイ村との経済関係が強い。



No. 14

バティン・ジャングット（Batin Janggut）は，これまで 7 人の妻がいて，子供が 33 人いる（本人も名前や年齢などをあまり把握していない）。世帯調査当時，妻は 3 人であった。バニン村（Kg. Baning）で小学校に勤務している妻（第 5 妻）とマンパス村

（Kg. Mampas）の妻（第7妻）は，姉妹である。そして，サロマー（Salomah）（第6妻）はダラム村（Kg. Dalam）の出身である。サロマーの母は華人でオラン・アスリに引き取られて養女となった。妻は3人とも，外向けには「妻」ではなく，「内縁の妻」としている。なぜなら，それぞれが「間違った結婚（*nikah salah*）」であったからである。詳細については，拙稿（信田 2002; 2003）を参照。とりわけ，サロマーとの結婚（1978年）は，息子ティカッやシンガー（Singah）をはじめとするモイェム（Moyem）（第3妻）の子供たちとの争いの原因となった。サロマーはシンガーの妻の妹である。バティン・ジャングットはモイェムと離婚した。

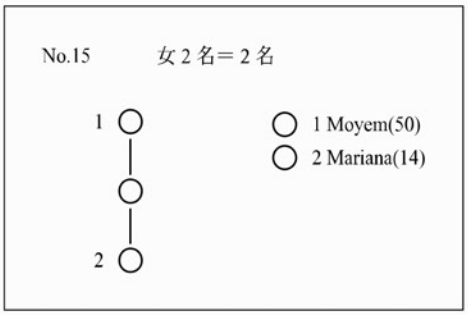
ゴム園やドリアン果樹園などを多く所有していた（150エーカーとも言われる）が，その大半をシンガーのキョウダイやティカッなどの子供たちに相続させた。世帯調査当時，ドリアン・タワール村のゴム園では，スハイダ（Suhaida）などの子供たちが採液作業を行ない，ダラム村のゴム園ではバティン・ジャングット自ら採液作業を行なっていた。

娘イアはマンク・ハシムの息子アニュと結婚した。一方，私が村を去った後の1998年11月，スハイダはアタウ（Atau）（クアラ・ピラーに近いTanjung Ipohの華人：実業家で村に出入りしているドリアン仲買業者の1人）と結婚した。これは，バティン・ジャングットとアタウとの親密な関係によるものと考えられる。

スハイナ（Suhaina）はギラン村（Kg. Gelang）の小学校教師である。1998年1月にスランゴール州出身のオラン・アスリ男性と結婚した。

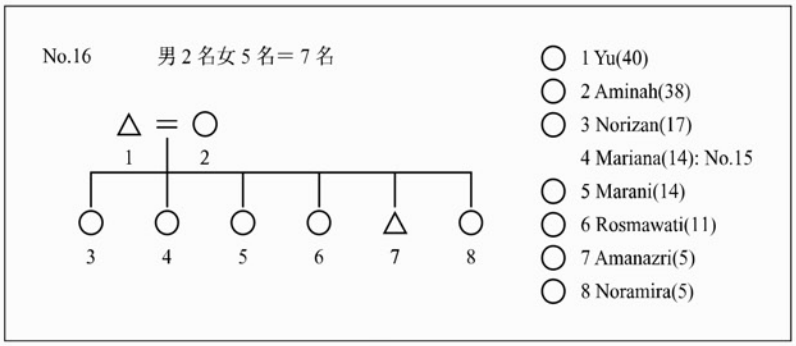
子供たちは，小学校時代は，すべてバニン村の小学校に通わせていた。そして週末になると，ドリアン・タワール村で過ごすことが多かった。これはブルチャの子供たちも同様であった。そのほかの村の子供たちはギラン村の小学校に通学するようになった。

2002年7月，スハイズキ（Suhaizuki）は，突然亡くなった。死因としてデング出血熱が疑われた。



No. 15

モイェム（Moyem）はバティン・ジャングットの3番目の妻であった。ダラム村出身である。しかし，バティン・ジャングットとは離婚した。世帯調査当時，孫マリアナ（Mariana）と同居していた。家の裏手のNo. 16には娘アミナー（Aminah）が住んでいる。バティン・ジャングットが与えたゴム園とドリアン果樹園を所有している。ゴム園で，娘と共に採液作業をする。彼女の第1イトコには，No. 53のエンタッ（Entak）がいる。



No. 16

ユウ（Yu）はアキ・マインの息子である。酒飲みで，トラブル・メーカーである。妻アミナーとの結婚には，バティン・ジャングットは猛反対した。ユウの前妻は死亡しており，アミナーは2番目の妻である。

アミナーの兄シンガーはドリアン・タワール村に住んでいたが，その後，妻の出身村ダラム村に移住した。サロマーとの再婚や村の開発をめぐって，父バティン・ジャングットに反発した。そして，ユウもまたバティン・ジャングットに反発し，シンガーやアキ・マイン派と組んでバティン・ジャングット派と対立した。

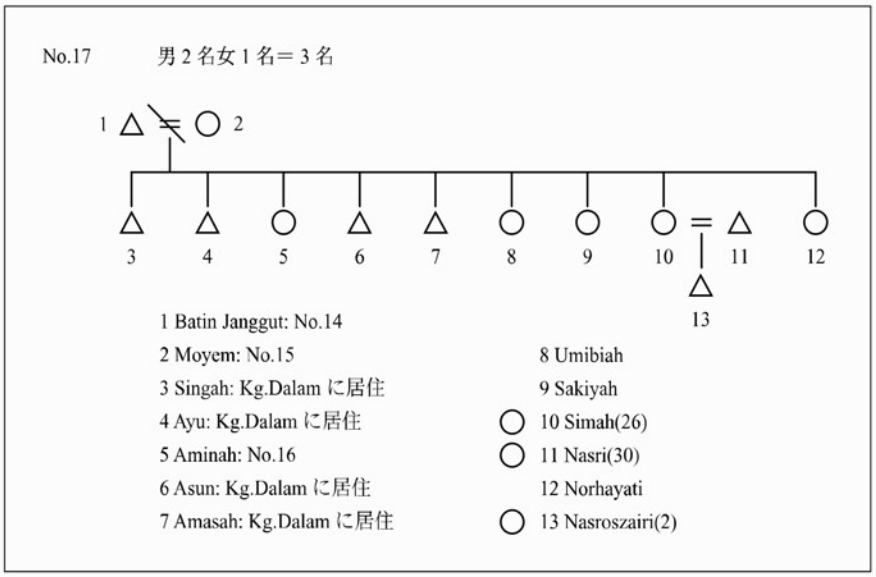
子供たちは，村の言葉を話すことはなく（とりわけ，親族呼称など），学校で習うマレーシア語を話していた。そして，一部を除いて，村びととの付き合いはなかった。「その後」，息子は窃盗をするなど，問題行動が増えた。

シンガーのゴム園は，華人に「賃貸」している。世帯調査当時，アミナーの妹たちは，スィマー（Simah）を除いて，村を出て生活していた。そのうちの2人はクアラ・ルンプールのブティックで働いていた。また，1人はオーストラリア人と結婚し，イスラームへ改宗していた（No. 17を参照）。

シンガーのキョウダイのうち，アユ（Ayu）だけが父バティン・ジャングットと親

密な関係を保っている。このことでアユと他のキョウダイとの間に確執がある。

No. 15 のモイェムの家とこの家は，バティン・ジャングットの家の上方に隣接している。かつては，モイェムの家屋にバティン・ジャングットは住んでいた。対立している家族が隣接していることは，緊張関係をさらに強める原因となっている。

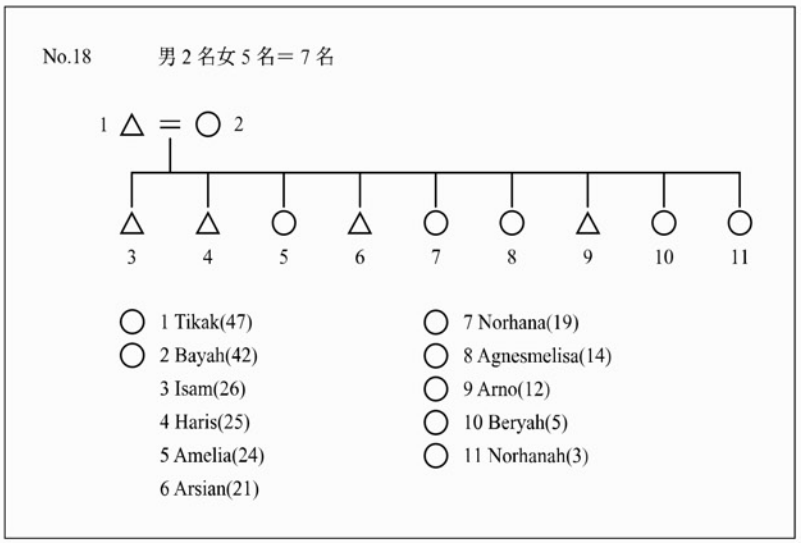


No. 17

スィマー（Simah）は幼稚園教師である（月給は 400 リンギット）。夫はパハン州出身のジャクン（Jakun）である。ラジオ（Radio Orang Asli という番組）のペン・フレンド制度を通して知り合った。世帯調査当時，夫はパハン州の州都クアンタン（Kuantan）の建設現場に出稼ぎに行き，留守がちであった。この家屋は，家屋建設プロジェクトで政府からバティン・ジャングットに対して与えられた家屋である。

No. 18

ティカッ（Tikak）はオラン・アスリ局の職員（1967–1979）をしていたが，途中で辞めて村へ帰ってきた。父バティン・ジャングットの「代理」として，RISDA や UMNO（United Malays National Organisation：統一マレー人国民組織，マレーシアの最大与党），JKKK（Jawatankuasa Kemajuan dan Keselamatan Kampung：村落開発保安委員会，村レベルにおける開発プロジェクトの配分を決定する委員会）などの開発にとって重要なポストに就いて，村の開発を進めていた。しかし，開発の進め方をめ



ぐって父バティン・ジャングットと対立した。一部のティカッ派を除いて，彼の開発の進め方は村の人びとに反感を持たれていた。

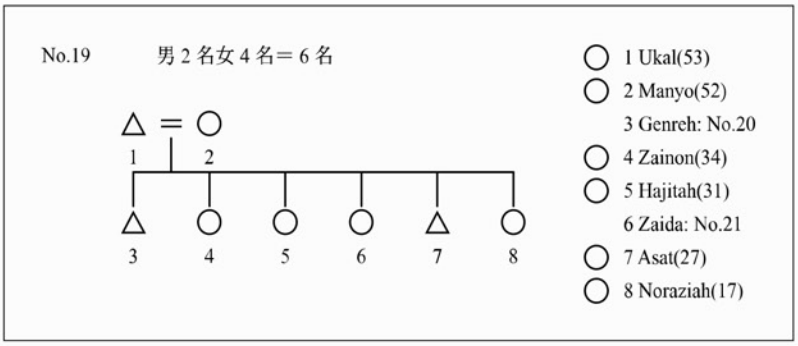
妻バヤー（Bayah）（Mah Meri と Temuan の混血）とはオラン・アスリ局職員時代に知り合い，結婚した。息子たちのほとんどは婚出していた。娘アメリア（Amelia）はマレー人と結婚し，イスラームへ改宗した。

この家はシンガーの家であった。シンガーとティカッは異母同父キョウダイとして親密な関係を持っていた。

私の調査時期の当初，バヤーはゴム採液作業をしていたが，途中から止めてしまった。ゴム園は華人に「賃貸」していたり，アジョイ（No. 28）の家族に貸していたりする。ティカッは土地の転売（実際には，華人がティカッの名で土地登記の申請を行ない，ティカッが手数料を受け取るということ）や木材伐採のコミッションを受け取る（伐採許可を申請して，華人業者が伐採作業を行ない，ティカッが手数料を受け取る）など，政府との仲介が必要な「仕事」をしていた。UMNO の支部長という肩書きが申請の許可に効力を発揮したのである。

ティカッは母を幼い頃に亡くし，バティン・ジャングットが男親 1 人で育てた。しかし，実際には，ティカッはジェナン・ミサイ夫妻によって育てられた。ティカッのゴム園やドリアン果樹園の一部は，ジェナン・ミサイが与えたものである。

「その後」，UMNO の支部長や JKKK の委員の役職を辞した。



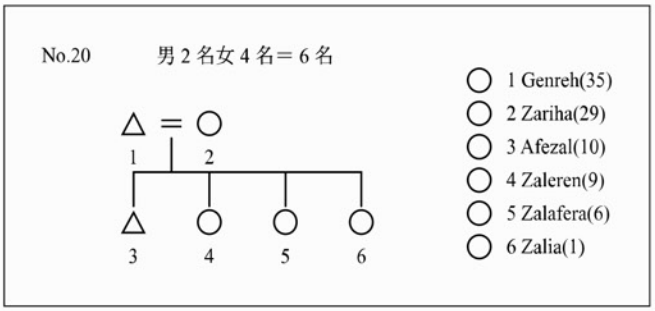
No. 19

ウカル（Ukal）の世帯のゴム園やドリアン果樹園が多いのは，妻マニョ（Manyo）の親族関係による。マニョはバティン・ジャングットの妹でワリス（*waris*：母系出自集団）の女性側の長でもある。

息子ゲンレーはオラン・アスリ局職員としてパハン州で勤務し，長らく家を留守にしていたが，バニン村の小学校教師として家族を連れて戻ってきていた。また娘ザイダはコンチョンと結婚して，隣接して住むようになっていた。息子アサットは，婚出したが，離婚して戻ってきていた。その他の娘たちは，世帯調査当時，テレコム大学（Universiti Telekom）で学んでいたノラズィアー（Noraziah），シンパン・プルタン（Simpang Pertang）の工場で働いていたザイノン（Zainon）（月給 400 リンギット），ゴム採液作業をしていたハジター（Hajitah）である。ノラズィアーは，「その後」，プトラ大学（Universiti Putra Malaysia）に進学した。村のなかでは裕福な家の一つである。ゴム園やドリアン果樹園の一部を子供たちが相続していた。

結婚適齢期を過ぎた娘がいるのは，彼女たちに見合う経済力を持つ男性がいなかったからである。アサットが離婚した理由もまた，彼の婚出先での仕事がなかったからであり，実家の方が経済的に豊かであったからでもある。アサットの妻が工場で働いていて，彼には仕事がなかったのである。

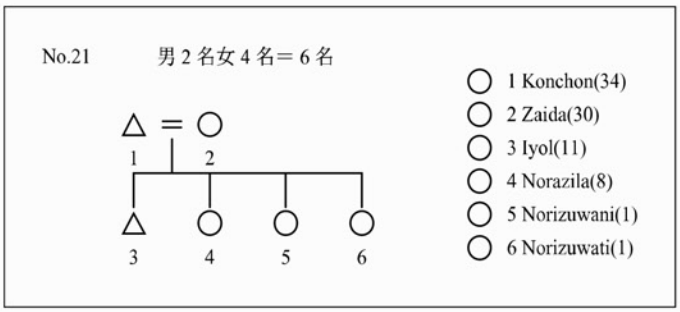
「その後」，ハジターはグンティン・ハイランド（Genting Highland）のホテルのレストランで皿洗いとして働くことになった。カジノで有名なグンティン・ハイランドでは，多くのオラン・アスリが従業員として雇われている。また，ザイノンはポート・ディクソン出身のオラン・アスリ男性（父親は華人）と結婚し，男子を出産した。そして，夫と子供を連れて，戻ってきた。夫の姉はマレー人と結婚していて，イスラームへ改宗している。



No. 20

ゲンレー（Genreh）はバニン村の小学校教師である。それ以前は，Kuala Lipis（Pahang）でオラン・アスリ局職員をしていた。オラン・アスリ局への就職には，ティカッと同様，バティン・ジャングットの影響力が考えられる。世帯調査当時の月給は993 リンギットであった。パハン州出身の妻ザリハ（Zariha）はスマイ（Semai）である。

ゲンレーはオラン・アスリ局職員として長い期間にわたって村を離れていたが，バニン村の小学校で働くようになると，次第に村の政治に関与するようになった。バティン・ジャングットもまた自分の「後継者」としてゲンレーを考えていて，1997 年 3 月には Panglima Tuha の称号を与えた。POASM（Persatuan Orang Asli Semenanjung Malaysia：半島マレーシア，オラン・アスリ協会，オラン・アスリの NGO 組織）の幹部でもある。

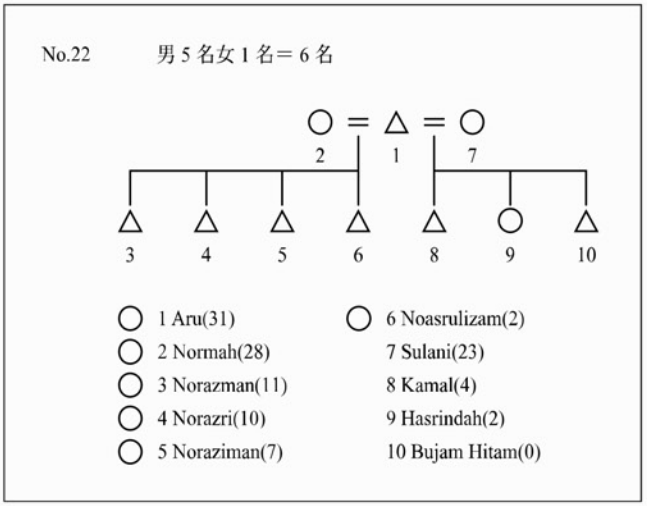


No. 21

コンチョン（Konchon）とザイダ（Zaida）の結婚は同一母系出自集団内の「間違った結婚」であった。このことについては，拙稿（信田 1999b; 2002）を参照。家屋は，コンチョンの実家とザイダの実家の中間に自力で建てた。コンチョンはゴムの採液作業ばかりでなく，狩猟にも熱心である。しかし，働き手はコンチョンのみであり，ややもするとゴムの採液作業よりも狩猟活動に熱心になりがちな彼の生業の仕方のため

に，経済的に苦しい時期もあった。家を建てた資金は，彼が森林伐採の仕事で稼いだものであった。

家にはザイダの両親やキョウダイがよく出入りをしていた。「間違った結婚」をして，母系出自集団の成員権を失ったにもかかわらず，日常生活においては，彼ら夫婦はウカル夫婦やザイダのキョウダイと親密な関係が続いていたのである。



No. 22

アル（Aru）はジェナン・ミサイの息子であり，妻ノルマー（Normah）はジェナン・ミサイと同じ母系出自集団の成員である。両者の親族関係は，第 2 イトコ（見方によっては第 3 イトコともなる）である。彼が 1997 年 2 月に第 2 妻と結婚したときには離婚しなかった。2 番目の妻スラニ（Sulani）はルティン（Leting）の妻であったが，アルと私通していた。

アルとの「姦通」が，「結婚」によって解決され，前夫ルティンが異議を申し立てなかったのは，アルがジェナン・ミサイの息子であるという権力構造が関係している。本来ならば，重罪である姦通が，ここでは村内の権力関係のバランスのなかで，軽罪として処理されたのである。このことについては，拙稿（信田 2002）を参照。

アルはジェナン・ミサイの息子ということで，開発にかかわる村の役職についていた。一時はティカッに近い人物だったが，バティン・ジャングット派に与するようになった。アルと再婚後，スラニがスランゴール州にある彼女の出身村に戻って以来，アルはほとんどそこで生活するようになった。実質的には，ノルマーとは別居状態で

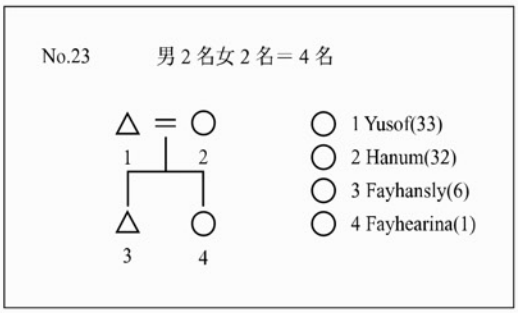
あるが，両者には親族関係があるので，離婚できないということであった。

アルとノルマーの息子たちが，母親のゴム採液作業の手伝いをしていた。彼らは，母親の親族関係から村のアダット・リーダーの称号を継承する立場にあり，バティン・ジャングットからジェナン・ミサイの「後継者」として期待されていた。アル自身は彼の母親の親族関係からドゥスン・クブール村（Kg. Dusun Kubur）のバティンの継承者であるが，ドリアン・タワール村ではアダット・リーダーの称号を継承することはできなかったのである。

アルがスラニの出身村で生活するようになって以来，家計はノルマーのゴム採液業による収入でまかなっているようであった。アルは，ゴム園の一部を「賃貸」している。

「その後」，アルの家族は「崩壊」した。ノルマーはキリスト教へ改宗し，そのことでアルと離婚した。さらにノルマーはイスラームへ改宗した。キリスト教への改宗に際して，ノルマーとの間の子供たちはアルが引き取った。母親ノルマーを助けていた息子たちは，ノルマーと別れた後，学校にも行かなくなり，酒を飲むことをおぼえるようになった。そして，そのうちの 1 人は農薬を飲んで自殺をはかった。

住む者がいなくなったアルの家には，ジャナン・ミサイ夫婦が住むようになった。アルはドゥスン・クブール村でマンクの称号保有者となった。



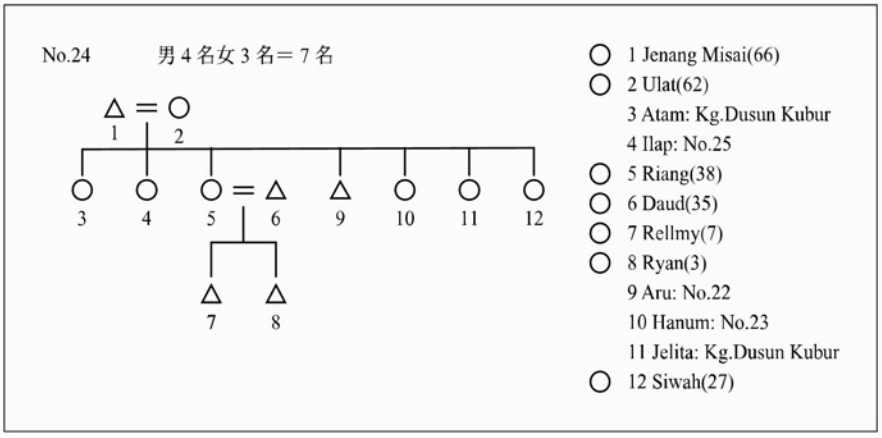
No. 23

ハノム（Hanum）はジェナン・ミサイの娘である。夫ユソフ（Yusof）はパハン州出身のジャクンである。彼の父親は華人であり，母親はオラン・アスリである。雑誌（*Dewan Masyarakat*）のペン・フレンド制度で知り合った。村の雑貨店を経営している。店の経営はジェナン・ミサイから引き継いだもので，政府からの援助がある。世帯調査当時，店の収入は月に 250 リンギットほどであった。ユソフは村の子供たちが

学校に通学するバスの運転手もしていた。オラン・アスリ局から生徒 1 人あたりの交通費が支給され，一カ月で 1,200 リンギットほどの収入であった。

息子ノノイ（Nonoi）を華人幼稚園に通わせていた。母方・父方双方に華人の血筋が入っているということもある（それはウナン（No. 9）も同様）が，華人学校の方が公立学校より教育環境が整っているという認識があるからである。

「その後」，バティン・ジャングットに与えられた宅地に家屋を建設中であった。



No. 24

ジェナン・ミサイ（Jenang Misai）はバティン・ジャングットの実兄である。Jenang の称号保有者である。かつては Panglima Kecil や Jekerah などの称号を保有していたこともある。また，一時的であったが，オラン・アスリ局職員であったこともある。RISDA のゴム園開発の第 1 回目の責任者はジェナン・ミサイであったが，2 回目以降はティカッに譲った。ゴム園の開拓を積極的に行なった 1 人であり，村の人びとから信頼されている。バティン・ジャングットが政府との交渉において政治力を発揮したとするなら，ジェナン・ミサイは村の経済において指導力を発揮したと言える。この 2 人のリーダーの下で，ドリアン・タワール村は「成功」したのである。ジェナン・ミサイはバティン・ジャングット同様，「華語（*bahasa cina*）」を話すことができる。また，華人名も持っている。

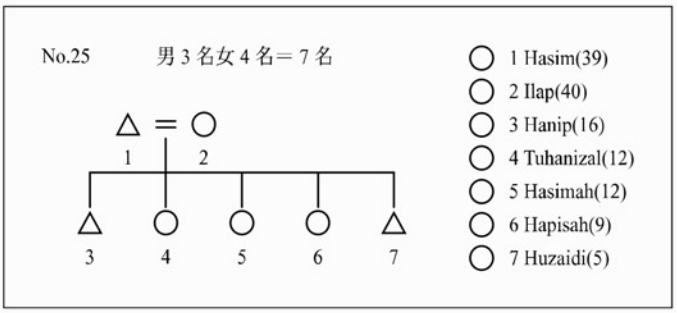
ジェナン・ミサイは 1950 年にプラドン（Peradong）で収容所生活をしていたときに，妻ウラット（Ulat）と結婚した。その後，2 番目の妻と結婚したが，4 カ月ほどで離婚した。ウラットはトゥオ・ジェナン（Tuo Jenang）の称号保有者である。アダット・リーダーの妻は，その妻としての功績から Tuo という「称号」を与えられ

るのである。

彼女は，日本軍によって左足を銃で撃たれた経験がある。その際に，そばにいた彼女の親族は，抱いていた赤ん坊と共に撃ち殺された。彼女の父親はドゥスン・クブール村のバティンであって，彼女の親族は村の中心的位置にいる。

子供は No. 22 のアルのみが男子である。娘たちのうち，No. 25 のイラップ（Ilap）と No. 23 のハノムはドリアン・タワール村に住んでおり，アタム（Atam）とジェリタ（Jelita）はドゥスン・クブール村に住んでいる。長女アタムの夫はドゥスン・クブール村のバティンである。また，未婚の末娘スィワー（Siwah）はドゥスン・クブール村で幼稚園教師をしている。「その後」，スィワーはオラン・アスリ男性と結婚した。ドゥスン・クブール村の「開発」もまたジェナン・ミサイ一族の指導によって行なわれている。

世帯調査当時，ジェナン・ミサイ夫婦は，娘リアン（Riang）夫婦と同居していた。リアンの夫ダウド（Daud）はカル（No. 8）の息子である。ジェナン・ミサイ夫婦もゴム採液業の仕事をしているし，リアン夫婦もゴム採液業をしている。ジェナン・ミサイは自ら開拓したゴム園やドリアン果樹園の多くを，子供たちに相続させており，ティカッにも一部を相続させた。アルの離婚後，電気を通さなくなったアルの家に住むようになった。



No. 25

ハシム（Hasim）の実父はジョホル（Johol）の華人で，実母はスムライ（Semelai）であった。実母が亡くなった後，実母の弟の養子となった。Batu 47 という村の出身であるが，1980 年に FELDA（Federal Land Development Authority：連邦土地開発庁）の開発で村は廃村し，Batu 17（シンパン・プルタン村）に移住した。その後，Batu 47 出身の人びとは，アカイ村とアイル村に分かれて移住した。養母はプサン（Pesan）の娘で，プサンはバティン・ジャングットやジェナン・ミサイの母インタン（Intan）

やムントゥリ・レワットの兄である。養母の姉妹に，ビハ（タホッの前妻）がいる。ハシムの実のキョウダイはすべて実父に育てられ，「華人」として生活している。かつて一度だけ対面したことがある。

ハシムはドリアン・タワール村のほかにシンパン・プルタン村でもゴム採液作業をしていたので，私が行なったゴム収入の集計は正確ではない。ハシムが狩猟しているのを見たことはなかった。狩猟のやり方を教える「父親」の存在がなかったからである。狩猟よりもゴム採液作業や農業にその生業を頼るということについては，その人が父親や親族から狩猟を教えられていないという理由も大きく関係しているようだ。趣味としての狩猟と，生業としての狩猟ではその意味が異なる。ハシムのように狩猟を教えてもらう機会を持たなかった者もいるが，多くの場合，生業の転換という時代状況によって狩猟よりもゴム採液作業などのその他の生業に生計の多くを依存しなければならなくなり，必然的に狩猟技術の伝承が行なわれる機会が減ったのである。

末子フザイディ（Huzaidi）は華人の幼稚園に通わせており，ハシムがハノムの息子ノノイと共にバイクでの送迎を担当していた。

6.3　スラッのキョウダイの親族群

No. 26 から No. 30 は，ムントゥリ・レワットの弟カリム（Karim）の子孫の親族群である。母系的な指向性の強いアダットの原則からすれば，ドリアン・タワール村に住むことはなかった人びとである。しかし，ゴム園やドリアン果樹園などの生きる糧がドリアン・タワール村にあるという理由で，カリムが婚出しなかったため，小さな親族群を形成することになった。

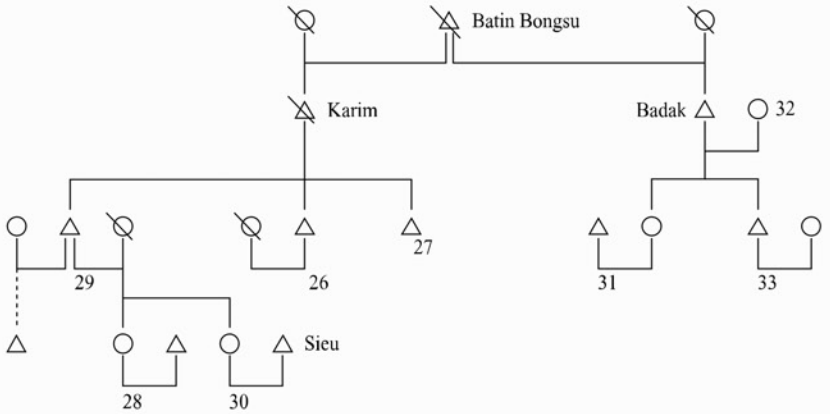


図 11　No. 26 から No. 33